

# 煮沸免疫元對決事件顛末 及ビ愚見

京都帝國大學教授

醫學博士 鳥 潟 隆 三

從來「煮沸免疫元」ニ關シテハ發明者ノ名譽ヲ毀損スルガ如キ誤謬ノ報道多ク流布セラレ、事實ノ真相ヲ傳フルモノ無シ、依テ余ハ本誌ヲ通ジ本問題ニ關スル成行ヲ時々發表シ、以テ事ノ真相ヲ現在及ビ後世ニ傳ヘント欲ス。故ニ余ノ報道セル事項中「事實相違」ヲ點アリト考フル人ハ速カニ其旨ヲ申込マル可シ眞ニ誤謬ナラバ直チニ訂正セン。

余ハ大正九年七月「煮沸免疫元」ノ製造販賣許可願ヲ其ノ當局者へ提出シタレドモ一向ニ許否ノ指令無ク、願書ハ其儘打チ棄テ置クノ有様ナルヲ看テ、大正十一年四月ニ至リ私信ヲ長與傳研所長ニ發シ「煮沸免疫元」ヲ研究シテ其ノ可否ヲ決定スルコトハ國家ノ傳染病研究所ノ責任ナリト極言シタリ。ソレニテ始メテ傳研ガ追試ヲ開始スルコトナリタリ。ソレニツケ長與所長ハ煮沸免疫元ノ製造方法ヤ「イムペヂン」ノ検査方法等ヲ習得セシメタシトノコトニテ「傳研所内ノ技術者ヲ派遣スル」トノコト故余ハ悦ンデ之ヲ迎ヘタリ、當時大正十一年五月一日附ニテ長與氏ハ余ニ私信

ヲ送リテ曰ク「免疫血清ヲ早速ニ用意スル、ソシテ不遠一兩名ヲ一先ツ君ノ所へ出張セシメル、ドウゾ我ガ研究所ノ追試ガ君ノ心血ヲ注イダ業績ヲ證明シテ吳レレバヨイト祈ツテ居ル、研究家ノ心理ハ僕ニモヨク分ル積リダ、況ンヤ二十年來ノ親シイ友ノ仕事デアル、眞面目ノ態度デカカル」ト。

余ハ當時甚ダ頼母シク感ジタリ、而シテ願書が大正九年七月ニ提出セラレタリシニモ拘ラズ追試ガヤツト大正十一年五月頃ニ至リテ行ハレルト決定セラレ、此間約二個年ノ歲月ガ空費セラレ居タリシコトハ、何人ノ責任ニ歸スベキカナドヲ考慮スルノ暇無カリキ、兎ニ角ニ追試ノ實行ガ開始セラレルコトニ立至リシヲ喜ビタリ。

其後間モ無ク吉積泰氏ガ大阪市外ニ於ケル余ノ研究所ニ出張セラレ、余ハ煮沸免疫元ノ製法ヤ、「イムペヂン」現象検査方法等ヲ一々實地ニ就テ説明セリ。谷口腆二氏モ一回余ノ研究室ヲ訪問サレタコトガアリシモ、何等技術上ノ見學ハセラレザリキ、而シテ其際卒然トシテ余ニ問ヒテ曰ク、「ワクチンノ反應物質(副作用ノコト)ハ「イムペヂン」ニアルトノ御意見ナノデスカ(自分ハ左ハ思ハズトノ意志ヲ示

シテ」ト問ヒカケタリ。余ハ心中『此人ハ煮沸免疫元ニ反  
對ダナ』ト感ジタリ。而シテ下ノ如ク答ヘタリ、『反應ノ全  
部ハ如何デアリマスカ知リマセヌガ、副作用ノ大部分ハ免  
疫元中ニ「イムペヂン」ガ含有サレテ居ルカラデアルト考ヘ  
テ居リマス』ト。

吉積氏ハ一個月位ニテ歸東サレタリ。故ニ煮沸免疫元ノ  
追試ハ大正十一年七八月頃カラ開始サレ、大正十二年七月  
末ニハ一段落ヲ告ゲタルモノナリ。ソレデ其ノ追試結果ヲ  
發表スル前ニ一度傳研デ内報スル故來テ吳レトノ長與所長  
ノ希望ニ依リ、余ハ大正十二年七月二十七日傳研ニ出頭シ

谷口氏ノ述ブル所ヲ聞キタリ、併シ一々「プロトコル」ニ就  
テ吟味スルコトハ無論不可能ナルモノナリ。當時余ハ谷口  
氏等ガ熱心ニ研究シタリシコトニ満足シ感謝スレドモ其ノ  
内容ニハ満足サレヌ點アルコトヲ述べ、別ニ討論書ヲ認め

翌朝長與氏ヲ其ノ私宅ニ訪問シテ之ヲ交附シタリ。其時ニ  
余ハ長與氏ニ對シ下ノ如ク述べタリ、『傳研ガ煮沸免疫元ヲ  
先ヅ治療用トシテ許可セントノ意志ナラバ、ソレデモ宜シ  
併シ豫防用トシテ不許可トイフガ如キ態度ヲ取レバ非常

ナル問題トナル可シ、余ハ決シテ默シ居ル者ニテハ非ザル  
ナリ、故ニ豫防上ノ許可不許可ハ未決定ニテ、更ニ研究ノ  
ツム迄當分保留トイフコトニセラレタシ』ト長與氏ハ之ニ  
對シ『諾』ト明言セリ、コレ大正十二年七月末ノコトナリ。

然ルニ其後ニ至リテ普通新聞及ビ通俗醫事雜誌ノ二三ハ  
頻リニ『煮沸免疫元ハ無効ト決定セラレタリ』云々ノ記事ヲ  
流布シ事態甚ダ異様ナリキ。而シテ最モ異様ナルハ傳研ガ  
其「プロトコル」ヲ公表セザルノ點ナリ。故ニ余ハ大正十三  
年九月十三日附ヲ以テ左ノ通りノ陳情書ヲ内務省へ提出セ  
リ。コハ余ガ煮沸免疫元ノ發明者タルト同時ニ京都帝國大  
學教授ノ資格ノ下ニテ提出シタル者ニシテ、煮沸免疫元ノ  
製造販賣許可出願人ノ立場ヨリ陳情セル次第ニハ非ザルモ  
ノナリ、其ノ全文下ノ如シ。

### 陳情書

本日私ハ敢テ陳情書ヲ閣下ニ差上ゲ左記ノ件ニ就テ閣下ノ御清鑑ヲ願ヒ上  
ゲマス。

煮沸免疫元(コクチゲン又ハ無菌體ワクチン)製造販賣

認可ノ件

(出願人 鹽田 敬  
日附 大正十三年五月二日)

右願書中ニアリマス煮沸免疫元(コクチゲン)ハ私ノ發明デアリマシテ大正  
九年二月二十日第三五八五四號ヲ以テ政府ノ特許ニナツテ居ルモノデアリ  
マス、コレハ特種ノ製造方法ニ據ル細菌成劑デアリマシテ左記ノ如キ特異  
ナル諸點ガ具備サレテ居ルコトヲ立證シ得タモノデアリマス。

(一)豫防治療品トシテ從來使用セラレ居ル「ワクチン」ニ代用セラレ得可キ  
モノタルコト。

(二)効力ハ同等以上ニシテ然カモ「ワクチン」ニ比シ副作用輕微ナルカ或ハ  
全然副作用無キコト。

(三)二ヶ年以上経過スルモ効力ニ變化無キコト。

從テ平時ニ於テ製造貯藏可能ナルコト。

(「ワクチン」ノ有効期間ハ六ヶ月、從テ平時ニ於テ大量ヲ製造貯藏シ置キ一朝必要ノ時機ニ際シテ一時ニ供給不可能ナリ)

(四)熱帶地方ヲ經由シ輸送スルモ性質ニ變化ヲ來サザルコト。

(「ワクチン」ハ性質ニ變化ヲ來サシメズシテ熱帶地方ヲ經由シ輸送スルコト不可能ナリ)

(五)煮沸免疫元ハ攝氏百度ニテ熱氣消毒セラレ且無菌的濾過セラレタルモノ故絕對ニ腐敗セズ人體使用上偶發的感染ヲ絕對ニ防止シ得ルコト。

(「ワクチン」ハ有菌體性ニシテ消毒ハ主トシテ攝氏六十五度ノ低温ニテ行ハレ石炭酸〇、五%ノ添加ニヨリテ消毒ノ不完全ヲ補ヒ居ルモノナレドモ事實上ハ消毒不完全ニシテ人體使用後偶發感染ヲ起シ時ニ死亡者ヲ出シタル實例アリ)

(六)煮沸免疫元ハ普通室内ニテ日光直射ノ下ニ保存スルモ何等ノ變化ヲ來サズ從テ保存方法ハ甚ダ便利ナリ。

(「ワクチン」ノ保存ニハ普通氷室及ビ暗處ヲ指定セラル從テ保存方法而倒ナリ)

諸テ一定ノ細菌成劑ノ製造販賣ヲ許可スベキカ否カノ問題ニ當リテ現ニ政府ノ諮問機關トナリ居ルモノハ東京帝國大學傳染病研究所デアリマス併シ私ハ此問題ニ就テハ上記研究所ヲ以テ唯一ノ政府諮問機關ト爲スコトハ左記ノ點ニ於テ不適當ナルモノト考ヘマス。即チ

(一)該研究所ハ東京帝國大學ニ屬シ居リ技師ハ何レモ同大學ノ出身者ノミナルガ故ニ從テ京都帝國大學卒業者ニシテ且ツ現ニ京都帝國大學教授タル私ノ學術上ノ發明ニ對シテハ一定ノ學問的反感ノアリ得キコトハ免レズ從テ中正ナル判定ヲ得難キ状態ニアリ。

(二)該研究所ハ現ニ「ワクチン」類ノ發賣ニヨリテ利益ヲ得ツツアリ從テ

「ワクチン」ノ販路ヲ狹メ得ル可能性ヲ有スル煮沸免疫元發賣ノ許可如何ニ向ツテハ是亦タ中正ナル判定ヲ期シ難キ状態ニ在リ。

即チ一般論トシテ煮沸免疫元ノ問題ニ臨ンデ東京帝國大學傳染病研究所ノミヲ唯一ノ諮問機關トナスコトハ前記ノ理由ニ基キ不適當ナルモノト考ヘマス。

マタ一方政府ノ諮問ニ對スル答申ハ傳染病研究所長ノ名ノ下ニ進達サルルデアリマシヨガ其ノ實ハ傳染病研究所ニ奉職スル二三ノ技術者ガ直接ニ此問題ヲ調査スルノハ當然デアリマス諸テ東京傳染病研究所ニ於テ煮沸免疫元ノ問題ヲ調査シタル主任技術者ハ同所技師谷口臆二氏デアリマス然ルニ此主任者ハ此問題ヲ調査スルニハ全然不適任者タルノミナラズ早く既ニ調査主任者タルノ資格ヲ失墜シテ居ル者ト私ハ斷定致シマシタ、ソレハ次ノ事實デ立證ガ出來テ居ルト考ヘマス。

(一)大正十二年四月四日谷口臆二氏ハ傳染病研究所内ノ其ノ技師室ニ於テ煮沸免疫元効力ノ比較ニ關シ私ガ調査報告ヲ口頭ニテ行ヒタルニソレヲ聽取シタル後左ノ言ヲ發シタリ。

「それでもいくらも、ケチを着けることが出來ます云々」

(二)同日同所ニ於テ私ノ辭去スル前谷口臆二氏ハマタ次ノ言ヲ弄シタリ。

「私も人の尻拭ひはモ一太抵いやになりましたから早く調査報告を仕様と思ひます云々」

以上ノ事實ハ谷口臆二氏ハ政府ノ側ニ立テル主任調査技師トシテ既ニ私ニ對シ抑制シ得ザル一定ノ惡感情ヲ有シ居リ(多分私ノ發明ニ對スル嫉視)私ノ學術研究ヲ中傷セントノ意志アルモノタルコトヲ偶然發露シマタ煮沸免疫元ノ追試研究ヲ糞土ヲ取扱フガ如ク嫌惡スルコトヲ表明セルモノ一シテ私ハ此事實ニ立脚シ谷口臆二氏ハ公人トシテ根本的ニ調査主任者タルノ資格無キ者ト斷定致シマシタ。

諸テ外部ニ事實トシテ現ハレタル谷口氏ノ措置モ亦十分ニ前記ノ如キ同

氏衷心ノ心理狀態ノ惡辣無道ナルコトト相照應シテ居リマス、左ノ諸項ニ於テソレガ立證サレテ居ルモノト考ヘマス。

(一)私ハ自家製造ノ窪扶斯煮沸免疫元ト當時傳染病研究所ヨリ發賣セラレ居ル窪扶斯「ワクチン」トヲ人體ニ就テ規定ノ如ク豫防注射ヲナシ其効力如何ヲ検査シタルニ煮沸免疫元ノ方ガ副作用輕微ナル點ニ於テモ免疫ガ同等以上ナル點ニ於テモ「ワクチン」ニ優越セル實證ヲ得タル調査報告ヲ示シテ谷口臆二氏ニ私ノ製造ニ係ハル腸窪扶斯煮沸免疫元ヲ追試ノ目的ニテ提出(大正十二年四月四日)シタリ。

此際同氏ハ傳染病研究所ニモ附屬病院患者アル故之ヲ追試セント言明致シマシタ然ルニ同氏ハ一回モ私ノ調査ヲ追試セザリキ而シテ以上ノ如キ態度ノ不都合ナルコトヲ私ガ何回モ醫事雜誌(醫海時報免疫研究業報)ニテ公然問責スレドモ同氏ハ今日ニ至ルマデ條理アル答辯ヲ與ヘズ。

(二)谷口臆二氏ノ煮沸免疫元ノ調査ハ大正十二年七月末ニ於テ一段落ヲ告ゲタリト報告セルモ一年以上ヲ經過セル今日ニ至ル迄モ學界ニ右調査記録ヲ發表シ居ラズ而シテ單ニ煮沸免疫元ヲ毀傷スルガ如キ結論ノミヲ既ニ數回毎回同一文章ニテ種々ナル通俗雜誌ニ投稿セリ。

右ニ對シ私ハ詳細ナル學術的報告ノ發表ヲ督促スレドモ谷口氏ハ今日ニ至ルモ未ダ實行セズ。

右ハ何レモ學術ノ追試作法トシテ一般學界ニ認メラレ居ル不文律ト甚ダシク抵觸スルモノデアリマシテ谷口臆二氏ノ追試ニハ何等ノ誠意モ無キ實證デアリマス從テ單ニ私ノ研究ノ中傷ノ目的トシテ居ルモノナルコトヲ明白ニシタルモノト考ヘマス煮沸免疫元ノ追試調査ヲ東京帝國大學傳染病研究所ニ於テ何人ニ委任スベキカハ當該研究所長ノ權限ニ屬スルコトデアリマシテ政府ノ關知スル所デ無イカモ知レマセン併シ乍ラ現在ノ調査技術者タル谷口臆二氏が如何ナル心態及ビ如何ナル調査振リヲ公表シテ居ルカヲ知ルニ足ル可キ事實ヲ握リ以テ其ノ情ヲ察スルコトハ亦タ政府者ノ緊要事

カト考ヘマス。

以上ノ記載ニヨリテ私ハ第一東京帝國大學傳染病研究所ヲ以テ本問題ニ對スル唯一ノ諮問機關ト爲スコトハ其當ヲ得タルモノニ非ザルコト及ビ第二前記研究所ニ於ケル現在ノ調査主任谷口臆二氏ハ公人トシテ調査者タルノ根本ノ資格ヲ失墜シテ居ル者デアアルコトノ立證ヲ舉ゲタト信ジマス。

倍テ本問題ニ對スル比較的公正ナル判斷ハ宜シク之ヲ「ワクチン」發賣ヲ營業シ居ラザル純正ノ研究所ニ於ケル追試成績ニ求メルノガ至當デアリマシヨウ即チ之ハ臺灣總督府中央研究所衛生部ニテ部長堀内次雄氏指導ノ下行ハレタル腸窪扶斯南煮沸免疫元ノ追試研究報告中ニ求ムルコトガ出來ルト考ヘマス。

同部ニテハ「煮沸免疫元」ニ關シ二三年來研究ヲ續行シ既ニ詳細ナル實驗記録ヲ有スル報告書ガ度々學界ニ印刷發表サレテ居リマス最近ノ報告ハ大正十三年三月二十八日發行ノ臺灣總督府中央研究所衛生部業績集中ニ掲載サレテ居リマスガ其ノ結論ノ最後ニ左ノ文ガ記述サレテ居リマス。

「之ヲ要スルニ腸窪扶斯南煮沸免疫元ハ其ノ毒性ヲ「ワクチン」ノ夫レニ一致セシムル丈ケノ分量ヲ以テスレバ「ワクチン」ト殆ンド同等ノ効果ヲ齎スベク此ノ場合接種反應の輕微ナルノ點ハ推賞ノ價値アルモノト認メザルベカラズ」(同雜誌第二二四頁)。

之ハ期セズシテ煮沸免疫元ノ發明者タル私ノ研究結果及ビ主張ト全ク一致シテ居ルモノデアリマス。

以上私ノ記載シタル各種ノ事實ガ果シテ眞ニ事實デアルカ否カハ、ソレゾレ調査セシメラレタナラバ判明致スコトト考ヘマス以上ノ事實ニ立脚シテ私ノ主張致シマス事柄ガ果シテ閣下ノ御意見ト一致スルヤ否ヤハ別問題デアリマシテソレハ唯ダ閣下ノ御明察ニ屬スルコトデアリマス。

抑モ現在實地使用ノ「ワクチン」類ガ副作用強クシテ一般民衆ハ之ヲ嫌惡

忌避シ防疫上廣ク實行スルコトノ頗ル困難デ「ワクチン」ハアリト雖ドモ無キガ如クデアロコトハ周知ノコトデアリマスマタ陸海軍等ニ於テハ兵士ニ對シ否應無シニ各種「ワクチン」ヲ豫防的ニ注射致シマスガ發熱其他ノ副作用ニテ休養ヲ要スル者多ク時ニハ死亡者ヲ出スコトモ明白ニナツテ居リマス。

マタ「ワクチン」ハ平時ニ於テ貯藏シ置キ不時ノ急ニ備ヘルコトヤ熱帶地方ヲ經過スルコト等モ不可能デ其保存方法モ面倒デアリマス。

斯ノ如キ事態ノ明白ナル際此等ノ缺點ヲ殆ンド凡テ除去シ得タル煮沸免疫元ノ發明サレタルコトハ誠ニ推賞シテヨロシキモノデ速カニ許可スベキモノカト考ヘマス。

一體此種ノ成劑ノ可否ヲ決定スル一般の方針トシテハ

一、其成劑ニハ學術上ノ基礎ガ有ルカ無キカ

二、其ノ成劑ハ人體ニ使用危險ナリヤ否ヤ

ノ二點ヲ檢査シ人體ニ何等危害ヲ加ヘズ而シテ一定ノ學術上ノ基礎ヲ有スルコト明白ナルモノハ速カニ發賣ヲ許可スベキモノカト考ヘマス。

此際其ノ成劑ガ果シテ發明者ノ主張スルガ如キ効力アリヤ否ヤ又ハ果シテ「ワクチン」ヨリモ優秀ナリヤ否ヤヲ確定セザレバ發賣ハ許可シテナラヌト申スモノデハ無カロウト考ヘマス然ラザレバ傳染病ガ悉ク豫防シ得ラレ悉ク治癒シ得ラレタ曉デ無ケレバ其成劑ノ發賣ヲ許可サレ得ヌト申ス理論ニ立チ至ルデアリマシヨウ。

一體「煮沸免疫元」ガ効力が弱イ「ト申スガ如キハ成劑ノ絶對的性質デモアリマセン、マタ事實デモアリマセン。ヨシソレガ事實デアリト假定シテモ有効成分ノ含量ヲ増大スルカ或ハ注射量ヲ増加スレバ、ソレニテ効力ハ増進サレルモノデアリマス。果シテ然ラバ前記谷口技師ガ「煮沸免疫元」ハ「ワクチン」ヨリモ効力弱シ「ト申サレル中傷の主張ヲ信ジテ煮沸免疫元ノ發賣ヲ許可セザルガ如キコトアリト假定致シマヘナラバ是レ全ク此種成劑發賣

許可ノ一般の方針ヲ無視スル非常識ノ處置ト申サネバナリマスマイ。單ニ「ワクチン」ヨリモ効力が弱シトノ假面的理由ノ下デ煮沸免疫元ノ有シテ居ル濟生ノ天分ヲ國家醫事衛生ノ諮問機關ガ滿四ヶ年以上モ抑壓シ更ニ何時迄モ其壓迫ヲ繼續シ發賣公許ノ裁決ヲ際限モナク遷延サセルト假定致シマシタナラバソレハ洵ニ國家ニ及ビ學術研究ニ對スル罪惡デアリマシヨウ。

歐洲大戰以來政府モ民間ノ有志者モ類リニ理化學ノ研究ヲ獎勵シ研究者ニ向ツテハソレゾレ補助金ヲ支出シテ居リマス現ニ帝國學士院ノ調査ノ結果トシテ煮沸免疫元ノ研究ニ就テハ東照宮三百年祭記念會カラ金二千圓ノ補助ヲ受ケテ居リマス。又タ政府ハ類リニ國產ヲ獎勵シ以テ外國製品ノ輸入ヲ防ガントシテ居リマス。然ラバ煮沸免疫元製造販賣ノ許可ニ就テノ政府ノ態度ハ一面ニハ一國ノ學術研究ニモ影響シ他面ニハ國產獎勵ノ實際ノ上ニモ影響スルハ當然デアリマスカラ決シテ發明者ノ一個人ニ關シタ小問題デハ無カロウト考ヘマス。

煮沸免疫元ノ製造販賣許可ノ願書ハ最初大正九年七月二十二日ヲ以テ出願サレテ居リマス今日ニ至ル迄實ニ滿四ヶ年以上ヲ經過致シテ居リマス此間大正十二年九月ニ大震災ガアリタリトハ申セソレ迄ニ於テ既ニ許否ノ決定ガアマリニ遲延シテ居リマス一方ニ於テ既ニ政府ガ特許法ニヨリテ保護シテ居ル發明權ノ行使ヲ前文ニ於テ立證セルガ如ク何等正當ナル理由無キノミナラズ個人的惡感情ヲ以テ此ノ如ク長キ年月ノ間抑壓シテ居ルノハ斷ジテ正シキ處理トハ考ヘラレマセン致テ情ヲ陳ベ事理ヲ疏明シテ閣下ノ御明察ニ訴ヘル所以デアリマス。

頓首敬白

大正十三年九月十三日

京都帝國大學教授

醫學博士

鳥 湯 隆 三

內務省內務政務次官 片岡直溫殿

此ノ陳情書ニアル通り大正十二年四月四日傳研技師タル

下ノ如シ。

大正九年九月三十日付衛阪第六二九號大阪府鳥潟隆三出願ノ細菌學的豫防治療品ハ在來ノ者ト甚ダシク其製造方法ヲ異ニスルヲ以テ出願者ノ實驗報告並ニ治験例ヲ調シタレドモ一定ノ歸結ニ達シ得ザリシヲ以テ傳染病研究所ニ於テハ特ニ委員會ヲ設ケ、技師谷口臈二技手井上善十郎、技手吉積泰ヲシテ研究セシメタリ、實驗者ハ出願者ノ記載ニ從ヒ、肺炎菌、チフス菌、バラチフス菌、コレラ菌ヨリ調製セル煮沸免疫元並ニ出願者ノ調製セルチフス菌煮沸免疫元ニツキ

甲、各種煮沸免疫元ノ試験管内ニ於ケル抗原性能力検査

一、補體結合反應

二、沈降反應(層重法及容量法)

三、特異性

四、水素イオン濃度

五、化學反應(蛋白反應)

附各種細菌凝集元性能力ノ煮沸ニヨル變化

乙、各種煮沸免疫元ノ動物體內ニ於ケル造抗能力ノ検査

一、免疫家兎血清ノ効價測定

a、試験管内(凝集反應、沈降反應、補體結合反應、溶菌現象)

b、動物體內(感染防禦試驗)

二、活動性免疫試驗(マウス及モルモット)

三、抗體發生速度検査(凝集反應)

丙、煮沸免疫元ノ試験動物ニ對スル毒力検査

各項ニ就キ詳細ニ研究シタル結果

一、肺炎菌、チフス、バラチフス及ピコレラ菌ノ煮沸免疫元ハ執レモ沈

澱反應及補體結合反應ニ對スル抗原ヲ含有ス

二、之等ノ抗原ハ執レモ種屬特異性ヲ有ス

ハ資格ヲ以テノ谷口氏ハ學者ノ禮儀作法モ何モ無視シタル頗ル不埒ナル言ヲ余ニ浴セ懸ケ、井上、吉積兩學士ノ面前ニ於テ余ニ侮辱ヲ加ヘタルコトハ余ノ忍容シ難キ事項ナリ。當時谷口氏ハ余ノ口頭ノ報告ヲ聽取セル後チ卒然トシテ曰ク『それでもいくらもケチをつける事が出来ます』ト。余ハ此言ニヨリテ非常ニ驚カサレタレドモ次ノ如ク述べタリ。『左様です。どの様な業績にでもケチをつけるつもりになれば何かしらつくものです』ト。茲ニ於テ少時沈黙ノ後谷口氏曰ク、『冰冷裝置ヲ有スル研究所ハ本邦ニ於テハ傳染病研究所ノミナリ云々』ト、『蓋シ室扶斯菌「ワクチン」ト煮沸免疫元トヲ使用シテ得タル血清ノ保存ガ冰冷裝置中ニ於テセラレズ普通ノ氷室ニ於テセラレシガ故ニ余ガ「ワクチン」ニヨリテ得タル血清ガ不成績ニシテ、煮沸免疫元ニテ得タル血清ガ却テ好成績ト爲リシナリ』トノ意ヲ漏シタルモノナリ。谷口氏ノ此等ノ暴言ハ徒ラニ傳研ノ權威官衙ノ權威ヲ笠ニ被テ『自己コソ判斷者ノ權ヲ掌握シ居ル者ナレ』トノ驕慢心ノ發露ト見做ス可キノ他、何等正當ナル理由アリシニ非ズ。余ハ此ノ種ノ事實ニ對シテハ絶對的ニ其ノ不埒ト無道トヲ責ムル者ナリ、而シテ飽ク迄モ其ノ責任ヲ問ヒテ止マザル者ナリ。

以上ノ陳情書ニ對シ大正十三年九月七日附ニテ谷口氏ハ一ノ辯解書ヲ内務省ヲ經テ余ニ交附セラレタリ、其ノ全文

三、抗原ハ煮沸ニヨリテ細菌體ヨリ濾液中ニ漸次遊離溶解シ來ルト共ニ煮沸ニヨリテ漸次破壞セラル

四、補體結合反應ヲ以テ檢査セル成績ニヨレバ肺炎菌濾液ニ於ケル抗原含量ハ菌液ノ有スル夫レノ約二十分ノ一以下ナリ

五、各種細菌ノ煮沸濾液ハ蛋白反應ヲ呈シ凝固蛋白ノ含量ハ約五萬分ノ一ニ過ギザレドモアルブモ一ゼプトン以下ノ蛋白分解產物ハ比較的多量ニ含有ス

六、細菌ノ被凝集性ハ煮沸ト共ニ漸次低下スレドモ、チフス、コレラニ於テハ一定時間ノ煮沸ノ後再び上昇ス

七、試験管内ニ於テ抗原性ヲ有スル煮沸濾液ハ之ヲ動物ニ注射スル時ハ免疫體ヲ發生セシムル能力アリ而シテ之ニヨリテ得タル免疫血清中ニ含有セララル免疫體ハ性質上ニ於テハワクチン注射ニヨリテ得タル者トノ間ニ差異ヲ認め難シ

八、然ドモ其免疫元性能力ノ分量的關係ハワクチンノ夫レニ比シ一般ニ甚ダシク庭徑アリ即肺炎菌製劑ニ於テハ僅ニ其痕跡ヲ證明シ得タルノミニシテチフス、バラチフス菌及コレラ菌(煮沸上澄液)ヨリ得タル者ニ於テハ其大量ヲ頻回ニ分チ注射スル際ニ於テハ比較的高度ノ免疫力ヲ賦與スル事ヲ得レドモ二三回注射ニ於テハワクチンノ五倍乃至一〇倍量ノ注射ニヨルモ兩者ノ免疫力賦與及抗體發生能力ハワクチンニ比シ遙ニ微弱ナリ

九、出願者ヨリ分與ヲ受ケタルチフス煮沸免疫元ニ於ケル試驗成績モ略同様ナリ

十、出願者ハ煮沸免疫元ニ於テハ之ヲ人體ニ使用シタル際在來ノワクチン使用ノ際ニ於ケルガ如キ副作用ヲ認ムルコト能ハズト稱スレドモ、チフス、バラチフス及コレラ菌ヨリ調製セル煮沸免疫元ノ「マウス及モルモット」ニ對スル毒力ハワクチンノ夫レノ二分ノ一ヨリ五分ノ一

ノ間ニアリ

### 結 論

出願者ノ方法ニヨリテ調製セル煮沸免疫元ハ性質上ニ於テハ抗原性能力及免疫元性能力ヲ有スレドモ分量上ニ於テハ加熱ワクチンノ夫レニ比シ遙カニ微弱ナリ

而シテ兩者ノ毒力ヲ同一ナラシムル量ヲ使用スルモ煮沸免疫元性能力ハ加熱ワクチンニ比シ甚ダシキ庭徑アリ

從ツテ鳥瀉氏ノ煮沸免疫元ハ優秀ナル免疫元ト認ムルコトヲ得ズ

(大正十二年八月十一日學術講演會ニテ發表、同時ニ醫海時報、醫事公論日本醫事週報、治療及處方ニ抄録掲載)

北里研究所々員、渡邊義政、内田重吉兩氏ノ實驗並ニ傳染病研究所技師石原喜久太郎氏ガベスト菌製劑ヲ以テ行ヒタル實驗モ前記試驗成績ト略一致ス

臺灣ノ鈴木、四ノ宮、壹岐三氏等ノチフス菌ニ就テ行ハレタル實驗ニ依レバ煮沸免疫元ヲ以テモ相當ノ成績ヲ擧ゲ居レドモ試驗方法不完全ニシテ結論ヲ得ルニ至ラザルモノト認ム、尙動物試驗ノ成績ヲ以テシテハ鳥瀉氏自身ノ成績モ當所委員ノ研究成績ト大差ナシ、只人體試驗ニ於テハ鳥瀉氏、及大阪赤十字病院醫員栗本義時、内村盛太郎氏等ノ報告ニ於テハ成績優良ナリト稱スレドモ實驗方法不備ニシテ讀者ヲ首肯セシムルニ足ラズ

以上委員會ノ實驗成績ニヨリ大正十二年八月當所主任會議ニ於テ左ノ如ク決議シタリ

一、豫防ノ目的ヲ以テ本製劑ヲ使用シ相當ノ効果ヲ得ン事ハ困難ニシテ若シ強イテ其効果ヲ收メントセバ極メテ大量ノ頻回注射ニ依ラザル可カラザルモノト信ズ、從ツテ其反應ハ從來ノワクチン類ニ比シ著シク大ナル可キテ以テ認可ス可カラザルモノト認ム



二、治療ノ目的ヲ以テ細菌學の製劑ヲ使用セントスル際ニ於テハ比較の少量ノ免疫元ニテ足ル、而シテ本免疫元ハ在來此目的ニ使用シツ、アル者ト性質上ニ於テハ其差異ヲ認メ難キヲ以テ左ノ各項ヲ訂正ノ上認可可然

(イ)本製劑製造ノ際使用スル菌液ノ含有スル菌量ハ一立方仙米中八〇ミリグラム以上トスルコト

(ロ)各種ノ本製劑ハ傳染病研究所ニ於テ當該細菌ニ對スル抗血清ヲ發表スルモノニ於テハ之等抗血清ト沈澱反應又ハ補體結合反應ヲ呈シ尙ビウレット反應スルオサルチール<sup>田</sup>反應等ノ蛋白反應性ナルモノニ限ル

(ハ)細菌學の製劑ノ内服又ハ吸入ニヨル治療効果ハ未ダ一般ノ承認ヲ經ザルヲ以テ本劑ノ使用方法ハ皮下又ハ靜脈内注射ニ限ル

(ニ)本免疫元ノ有効期限並ニ使用量及ビ使用方法ヲ詳記セシムルコトヲ要ス

右決議ニ基キ傳染病研究所々々ハ大正十二年八月二十四日附内務省衛生局長宛左ノ通り意見ヲ提出セリ

記

一、細菌學の製劑ノ内服又ハ吸入ニヨル効果ハ未ダ一般ノ承認ヲ經ザルヲ以テ不認可可然

二、其他ノ事ニ關シ本願書ハ其ノ記載方法不充充分ニ候間左ノ各項詳細記入方御配慮相煩ハシ度候

(イ)製造品ノ種類ハ十種類ト記載セラレタルモ販賣價格ノ頁ニ於テハ右十種ノ外インフルエンザ肺炎菌混合免疫元ヲ加ヘ十一種類トセル理由如何

(ロ)製造方法特ニ各種細菌ノ培養方法並ニ雜菌ノ混入ナキコトヲ認明スル方法

(ハ)各種免疫元ノ効價測定ノ方法  
(ニ)使用量並ニ使用方法並ニ禁忌

(ホ)本免疫元ノ使用ノ際ニ於ケル副作用  
(ニ)有効期限

以上

然ル處該書類ハ内務省ニ於テ九月一日ノ火災ニ罹リ燒失シ再提出ヲ命ゼラレタル由ニテ大正十三年七月三十一日衛防第一五〇五號ヲ以テ大阪府私立鳥鴻疫研究所々々長鹽田敬一名義ヲ以テ認可出願同年九月六日訂正申請目下審議中ナリ

附記

當所委員會ノ研究ハ研究中ト雖モ鳥鴻氏ノ依頼ニ應ジ實驗記錄ヲ供覽シ(大正十二年四月)尙大正十二年八月其成績ヲ公開スルニ當リテハ先ヅ以テ鳥鴻氏ト會見シ同氏が實驗方法並ニ實驗成績ニ大體ニ於テ満足セシモノナリ

以上

大正十三年九月七日

傳染病研究所技師

谷口 颯 二口 供

以上谷口氏記載ノ中ニテ第一、『北里研究所員渡邊、内田兩氏ノ實驗結果ハ谷口氏ノ主張ニ一致ス』トアレドモ、コハ誤謬ニシテ、此ノ兩氏ハ却テ『煮沸免疫元ニ就テノ余ノ主張』ヲ立證シ居タリシ者タルコトハ既ニ明白ナル事實ナリ(醫海時報大正十四年一月二十四日、同大正十二年一月十三日發行參照)。第二、傳研技師石原喜久太郎氏が「パスト」菌ニ就テ「ワクチン」ノ方が煮沸免疫元ヨリモ毒力小ニシテ免疫力大ナリトスル谷口氏主張ト一致スル實驗結果ヲ



得タリトノ陳述ハ、非常ニ怪シゲナルモノニシテ少クトモ從來此ノ如キ發表ハ學界ニハ存在セザルモノナリ。谷口氏カ、石原氏カ、兩氏ノ間ニ於ケル何カノ間違ヒニシテ、左様ノ事實ノ有無ハ非常ニ不審ノ至リナリ。

故ニ余ハ石原喜久太郎氏ニ對シ私信ニテ『果シテ谷口氏ノ述ベラルルガ如キ成績ヲ「ベスト」菌ノ煮沸免疫元ニ就テ立證セラレタリヤ、モシ然ラバ其ノ「プロトコル」ヲ見セテ貰フ爲ニ鳥瀉又ハ其ノ代理者ガ上京シテ石原氏ヲ訪問スベシ』ト申込ミタルニ、大正十四年二月二日附ニテ石原氏ハ返書ヲ寄セラレタリ、而シテ中ニハ左ノ記載アリ。

『初メ豫備試験トシテベスト寒天培養、煮沸免疫元、同ブイヨン煮沸免疫元ヲ作り家兔ノ免疫經過ト其免疫血清ノ検査ヲ致シ云々右ノ結果ハ煮沸免疫元ノ方ガ良成績ナリトノ見當立チ申候次デ精密ノ「プラン」ニ入りテ試験致ス考ノ所折惡ク熟練セル助手ガ轉任ノ爲メ試験ヲ中止シ云々』ト

即チ石原氏ノ豫備試験ニテハ煮沸免疫元ノ方ガ良成績ナリトノ見當立チ居タルモノニシテ、谷口氏ガ前文ニ示サレタルガ如ク傳染病研究所ノ名ノ下ニ内務省ニ報告シタル所トハ事實正反對ナルモノナリ。即チ石原技師ハ決シテベスト煮沸免疫元ニ就テハ谷口氏ト同一ノ結論ニ達シ居タリシ者ニテハ非ズ却テ反對ニ煮沸免疫元ノ方ガ良成績ナリトノ

見當立チ居タリシ者ナリ。コレ谷口技師ノ虛僞ノ申達トシテ目ス可キカ或ハ谷口氏ノ誤解トシテ解釋セラルベキモノカ、余ハ同氏ノ責任ヲ匡スベキノ必要ヲ認ムルモノナリ。何レニシテモ學界ニ一回モ發表セラレテ居ラヌ程ノ存在不確實ナル事項ヲ内務省ノ上司ニ申達シテ以テ有心カ無心カ煮沸免疫元ヲ傷ケント欲シタルガ如キハ國家ノ傳染病研究所ニ職ヲ奉ズル公人トシテハ不都合極マル行爲ナリト謂ツ可シ。

(必要アラバ余ハ何時ニテモ本件ニ關シ石原氏ト余トノ間ニ交換セラレタル信書ノ全文ヲ公表シテ以テ余ノ立場ヲ更ニ明白ニ立證スベシ)

大正十二年八月ニ傳染病研究所主任會議ニ於テ決議セラレタリシ事項ノ第一(谷口氏口供前文參照)ハ、余ヲ以テ見レバ單ニ『信ズ』トカ『認ム』トカノ想像說ニシテ、立證セラレタル學術研究結果ノ結論ニハ非ズ。此ノ如キ推定ヤ想像說ニテ『煮沸免疫元ノ事實』ヲ抑壓セント欲スルハ無理無道ナリ。余ハ傳研ガ國家ノ權威ヲ負ヒツツ輕忽ニモ此ノ如キ決議ヲ敢テシタルコトヲ幾重ニモ遺憾ト爲ス者ナリ。

第三、谷口氏ノ前記口供附記『先ヅ以テ鳥瀉氏ト會見シ同氏ガ實驗方法並ニ實驗成績ニ大體ニ於テ満足セシモノナリ』ノ記事ハ全ク事實相違ニシテ虛僞ナリ。當時余ノ提出シタル討論ハ例ヘバ大正十二年八月十八日發行ノ醫事公論ニ

於テ谷口氏ノ手ニテ發表サレタリ。其ノ第一四——一五頁ヲ一讀セラルベシ、何等ノ點ニ於テモ谷口氏研究ノ内容ニ満足シ居ザルコト明白ナルモノナリ(感謝トカ満足トカノ語ハ討論ノ冒頭ニ於テ何人モスル挨拶ナリ)。即チ谷口氏ハ全然虚偽ノ報告ヲ敢テシテ内務省ノ上司ヲ欺瞞セントシタル者ト謂ツ可キナリ。『石原氏ガ「ベスト菌」ワクチン」及ビ煮沸免疫ヲ比較シテ谷口氏ト同様ノ結論ニ達シタリ』トノ内務當局ヘノ谷口氏ノ報告ガ、既ニ前文ニ述ベタルガ如ク事實却テ反對ナリシコト立證セラレタルニ加ヘテ、此ノ如ク全ク明白ナル虚偽ノ報告サヘヲモ敢テシ居ルナリ。其罪決シテ輕カラザルモノト余ハ信ズル次第ナリ。依テ余ハ大正十三年九月七日附ヲ以テ前記谷口氏供ニ對スル辯駁書ヲ内務省ニ差出シタリ、其ノ全文下ノ如シ。

谷口技師口供ニ對スル辯駁書

大正十三年九月七日附ヲ以テ傳染病研究所技師谷口臆二氏口供御廻付ニ候處右ニ對シ左記各項愚見開陳當局ノ反省ヲ求ムル次第ニ候

- 一、谷口臆二氏ハ煮沸免疫元ノ追試研究報告ヲ醫海時報、醫事公論、日本醫事週報治療及ビ處方ニ抄録掲載シタリト雖何レモ同一文章ニシテ真正ノ學術研究ノ發表ニ於テ最モ必要トスル實驗記事ノ公表ハ無シ從テ同氏ノ結論ノ正否ヲ吟味スルコトヲ得ザルモノナリ換言スレバ同氏ハ結論ノミヲ發表シテ結論ノ根底ト爲ル事實ヲ發表シ居ラザルナリ從テ同氏ハ未ダ煮沸免疫元ノ研究ヲ眞ニ公然學界ニ向ツテ發表シ居ラザルモノナリ
- 二、且ツ上記ノ雜誌ハ何レモ醫海ニ於ケル普通新聞ニ匹敵スベキモノニシ

テ煮沸免疫元ノ研究結果ノ如キハ例ヘバ東京醫學會雜誌ノ如キ專門學術雜誌ニ於テ公表セラルベキ筈ノモノト思考ス、兎ニ角ニ谷口氏ハ實驗記錄ヲ明示シ自家結論ノ根據ヲ掲ゲ居ラザルナリ結論ノミヲ高唱シテ事實ノ立證ニ伴ハザルモノハ妄論ナリ

三、谷口氏ハ鳥湯ガ「谷口氏ノ實驗方法并ニ實驗成績ニ大體ニ於テ満足セシナリ」ト主張スレドモ、ソハ全然正反對ニシテ谷口氏ノ實驗方法「ワクチン」ナリ煮沸免疫元ナリヲ人體ニ使用スル成劑タルノ立場ヨリハ何等ノ實驗ヲナシ居ラザルノ點ニ於テ、マタ其ノ實驗結果中ニ「ワクチン」ノ毒性ガ煮沸免疫元ニ比シ六倍ナリシニ其ノ免疫元力ハ二倍ナリキト説明シナガラ煮沸免疫元ハ「ワクチン」ニ比シ同一毒力ノ下ニテハ効力劣弱ナリト結論セルガ如キニ向ツテハ最初ヨリ鳥湯ハ谷口氏ニ對シ反省ヲ求メ居ルモノナリ

四、鳥湯ト全ク無關係ニ行ハレタル臺灣總督府中央研究所衛生部ヨリ報告セラレタル窒扶斯菌ノ煮沸免疫元ニ關スル研究結果ハ全然鳥湯ノ主張ト一致シ居ルモノナリ谷口氏ハ此研究報告ニ對シテ惡口ヲ述ベ居ラレドモ谷口氏自ラ何等立證的ノ反證ヲ掲ゲタルニ非ズ一般學界ガ谷口臆二氏ノ「實驗記錄ヲ缺知シタル結論」ノミヲ信ズルヤ或ハ正々堂々詳細ナル實驗記錄ヲ明示シテ結論ノ正當ナルコトヲ立證シ居ル臺灣總督府中央研究所ヨリ報告ヲ正シト認ムルヤハ敢テ説明ヲ要セザル所ナルベシ

五、谷口臆二氏ハ煮沸免疫元ノ是非ニ關シテ發言セント欲スル前ニ其ノ結論ノ根據ヲ全部專門學術雜誌(余ハ東京醫學會雜誌ヲ希望ス)ニ於テ公表スルノ義務アルモノタルヲ感ズベシ

六、谷口氏ハ自家ノ結論ノミヲ壓制的ニ押シ着ケント欲スルハ公正ヲ缺クモノナリ

「煮沸免疫元ノ効力ハ「ワクチン」ニ比シ劣弱ナリ」ト唱フルガ如キハ煮沸免疫元ノ許可不許可ヲ左右スベキ根本問題ニ非ズ「効力」ハ「分量」乃至「含量」

ノ問題ナリ、分量乃至含量ヲ加減スル時ハ或ハ煮沸免疫元ヨリモ効力ノ弱キ「ワクチン」ヲ得可ク或ハ煮沸免疫元ヨリモ効力ノ強キ「ワクチン」ヲ得可キモノナリ

此際必要ナル問題ハ「同一毒力ノ下ニ於テ果シテ煮沸免疫元ノ効力ハ「ワクチン」ニ劣ルヤ」或ハ「同一効力ノ下ニ於テ煮沸免疫元ハ果シテ「ワクチン」ヨリモ毒性強キヤ」ノ問題ナリ

此點ニ關シ谷口技師ハ「ワクチン」ヨリモ煮沸免疫元ヲ以テ劣レリト主張スト雖其主張ニハ事實ノ基礎無ク何等ノ根柢モ無キ妄斷ナリ、鳥湯ハ此點ニ就テ既ニ種々ナル方面ヨリ煮沸免疫元ノ優越セルコトニ就キ十二分ナル研究ノ遂ゲ其ノ報告ハ各種ノ専門學術雜誌ニ發表セラレアリテ此點ニ就テハ前記臺灣總督府中央研究所衛生部ノ研究結果ハ期セズシテ鳥湯ノ研究結果ト一致シ居ルモノナリ同一毒力ヨリ出發シタル比較検査ハ谷口氏ハ一回モ行ヒタルコト無キモノナリ故ニ事實ノ基礎無クシテ議論セントスルハ全く無理ナリ

煮沸免疫元ハ煮沸免疫元トシテ發賣スルモノニシテ決シテ或ハ豫防用或ハ治療用トシテ同一菌種ニ就キテ二種類ノ成劑ヲ發賣スルモノニ非ズ例ヘバ腸窒扶斯煮沸免疫元ハ唯ダ一種ノ製劑アルノミナリ、コレヲ豫防用ニ使用スルカ乃至ハ治療上ニ使用スルカハ「煮沸免疫元ヲ應用スル醫師」ノ自由權限内ニ屬スルモノナリ

各種ノ煮沸免疫元中ニ於テモ、アルモノハ專ラ治療ニノミ利用セラレテ豫防ニハ利用シ難キモノアリ例ヘバ葡萄狀球菌煮沸免疫元、連鎖狀球菌煮沸免疫元、肺炎菌煮沸免疫元等ノ如シ

更ニアルモノハ專ラ豫防ノ目的ニノミ應用セラレテ治療ノ目的ニ適セザルモノアリ例ヘバ天然痘煮沸免疫元虎列拉煮沸免疫元ノ如シ

更ニ他ノモノハ豫防上ニモ治療上ニモ共ニ利用シ得可キモノアリ例ヘバ腸窒扶斯煮沸免疫元ノ如シ

以上述べタルガ如キ狀況ノ下ニ於テ煮沸免疫元ヲ劃一的ニ治療用トシテ許可スベキモ豫防用トシテハ許可セズト假定センカ其結果ハ滑稽ナルコトニ立チ至ル可シ例ヘバ天然痘煮沸免疫元乃至虎列拉煮沸免疫元ハ治療上ノ意味殆ンド無く專ラ豫防上ニ利用セラルベキニ拘ラズ豫防用トシテハ許可セズ治療用トシテノミ許可ス言フガ如キ不合理ナルコトニ立チ至ルベシヨシ治療用トシテノミ許可シ豫防用トシテハ許可セズトスルモ「煮沸免疫元ヲ使用スル醫師」ガ之ヲ豫防用トシテ使用スルコトハ常人ノ隨意ナリ政府ハ之ヲモ防止シ得ザルモノナリ蓋シ細菌學の成劑ハ何品ニ拘ハラズ治療上ニ使用シテ可ナルモノハ亦タ治療用トシテ使用シテ可ナリ同様に豫防用トシテ使用可ナルモノハ亦タ治療用トシテ使用シテ可ナルモノナリ、コレ細菌免疫學上ノ一般原則ナリ（但シ此際眞ニ果シテ豫防治療ノ目的ヲ達スルヤ否ヤハ自ラ別問題ナリ）故ニ細菌成劑ノ使用ヲアル一方ニノミ限定セント欲スルハ學術上不合理ナルノミナラズ實行上意義無キコトニ終ルベシ

煮沸免疫元ハ單ニ煮沸免疫元トシテ發賣スルモノナリ、コレヲ或ハ治療或ハ豫防又タ診斷ノ目的ニ使用スルカハ何レモ使用者ノ任意ナリ特ニ政府ガ治療用トシテ可ナレドモ豫防用トシテハ不可ナリトシテ限定セザルベカラザルノ理由ハ一ツモアルコトナシ何ヲ苦シンデカ政府ハ一面ニ於テハ細菌の成劑ノ一般免疫學の原則ト相反スル措置ヲ敢行シ他面ニ於テハ實際問題トシテ實施不可能ナル事項ヲ強テ行フノ必要アリヤ重曹ハ重曹トシテ發賣セラレコレヲ如何ニシテニ醫療ニ利用スベキカハ醫師ノ任意ナリ、ソレト同様ニ煮沸免疫元ハ煮沸免疫元トシテ醫界ニ提供セラルベキモノニシテ、コレヲ如何ニ利用スベキカハ各醫師ノ任意ナリ

政府ガ細菌成劑ノ効力ヲ統一セシメ之ヲ監視スルコトハ必要ナルコトナリ此ノ目的ニハ「ワクチン」ナリ或ハ煮沸免疫元ナリノ一定容量中ニ包含セララルベキ免疫元ノ單位ヲ大略限定シ、ソレニ合格セザル成劑ハ「ワクチン」ニモアレ煮沸免疫元ニモアレ發賣ヲ差止ムル様ニスレバソレニテ各種「ワク

チン」類或ハ煮沸免疫元類ノ不正品ヲ市場ヨリ驅逐シ得ルモノナリ  
ワクチン類ハ果シテ現在何程迄ノ豫防的効力アリヤヲ檢定スルコトヲ爲サ  
ズシテ單ニ煮沸免疫元ノ豫防的効力ヲ疑フノ餘リ、コレヲ治療用トシテノ  
ミ發賣セシメント欲スルガ如キハ不公平ニシテ且ツ學術ヲ理解セザル措置  
ト謂ハザルベカラズ宜シク速カニ「ワクチン」乃至煮沸免疫元ノ効力ノ單位  
ヲ限定シソレニ從ツテ「ワクチン」類煮沸免疫元類ヲ檢定スルノ舉ニ出ツ可  
キモノナリ現在世上ニ發賣セラレツ、アル「ワクチン」類中ニハ隨分怪ゲナ  
ル成劑アルコトハ大低ノ識者ノ認ムル所ナリ「ワクチン」類ヲ放任シテ單ニ  
煮沸免疫元ノミヲ壓迫セントスルガ如キ措置ニ對シテハ鳥瀉ハ斷シテ服從  
セザルモノナリ斯ノ如キハ全ク偏頗ナル處置ニシテ公正ヲ重ズル政府者ノ  
採ルベキ道ニ非ズト思考ス

谷口技師ガ煮沸免疫元ハ同一毒力ノ下ニ於テ「ワクチン」ヨリモ効力弱シ或  
ハ煮沸免疫元ハ同一効力ノ下ニ於テ「ワクチン」ヨリモ副作用(毒力)強シト  
飽ク迄モ主張スルナラバ谷口氏ト鳥瀉ト雙方立合ノ上ニ於テ或ハ第三者ノ  
立合ノ上ニ於テ實地ニ就キテ此問題ヲ解決スルノ措置ニ出デントコトヲ鳥瀉  
ハ當局ニ向ツテ要求スルモノナリ

大正十三年十月十四日

京都帝國大學教授

醫學博士 鳥瀉 隆 三

内務省

内務政務次官片岡直溫殿

右ニ對シ谷口氏ハ再ビ内務省ヲ經由シテ公文トシテ辯解  
書ヲ寄セラレタリ、其ノ全文下ノ如シ。

鳥瀉氏辯駁書ニ對スル解答

大正十三年十月十四日附鳥瀉隆三氏辯駁書要點ニ對シ愚見開陳仕り候  
一、鳥瀉氏ハ辯駁書第一項及第二項ニ於テ谷口等ノ煮沸抗原并ニ煮沸免疫

元ノ研究報告ハ單ニ抄録ニ止マリ實驗記事ノ公表ナキヲ以テ眞ニ公然學  
界ニ向ツテ發表シ居ラザルモノナリ云々、又谷口氏ハ實驗記録ヲ明示シ  
自家結論ノ根據ヲ掲ゲ居ラザルナリ、結論ノミヲ高唱シテ事實ノ立證之  
ニ伴ハザルモノハ妄論ナリ云々

ト稱スレドモ谷口ハ右論文ヲ内國四醫學雜誌ニ抄録發表シタルノ外大正  
十三年八月十一日傳染病研究所學術講演會ニ於テ詳細ナル實驗記録ヲ揭  
ゲ公表セシモノナリ

而モ谷口等ハ本研究ヲ公表スルニ先立チ特ニ鳥瀉氏ニ會見ヲ求メ傳染病  
研究所所長室ニ於テ所長及有志技師立會ノ下ニ約三時間ニ亘リ一々實驗  
記録ヲ示シ説明シ大體ニ於テ鳥瀉氏ノ同意ヲ得タルヲ以テ大正十三年八  
月十一日之ヲ學界ニ公開シタルモノナリ當日ハ傳染病研究所々員ハ勿論  
帝大、北研、慶大、陸海軍々醫學學校其他ヨリ同學ノ士出席シ聽衆堂ニ溢  
ル、ガ如キ盛會ナリシモ一人ノ討論者モナカリシナリ

而シテ當日鳥瀉博士ノ出席ナカリシハ演者並ニ聽衆ノ共ニ遺憾トセシ所  
ナリ、サレドモ講演ノ内容ハ鳥瀉氏ニハ特ニ前以テ詳細説明セシ處ナリ  
シヲ以テ氏ハ書面ヲ送リテ討論ヲ試ミ余ハ之ヲ反駁シタリ

而モ氏ハ討論ノ冒頭ニ於テ「谷口博士カラ煮沸免疫元ニ就テ綿密ナ又親  
切ナ研究ヲ發表セラレタノハ本邦學界ノ爲ニモ小生個人ノ爲ニモ感謝ノ  
至リデアリマス云々」ト述べ尙當日ノ講演内容ハ鳥瀉氏ノ特許權購入ノ  
約束アリト稱セラル、京都市新藥會社ヨリ速記者二名ヲ遣ハシ速記セシ  
メタル答ナルニ氏ガ今更谷口氏ハ未ダ煮沸免疫元ノ研究ヲ眞ニ公然學界  
ニ向ツテ發表シ居ラザルモノナリト稱セラル、ガ如キハ了解ニ苦シム所  
ナリ、只本研究講演後間モナク昨夏大震災ノ難ニカ、リ谷口ハ傳染病研  
究所臨時救護部長トシテ本年二月末日迄其事務ニ忙殺セラレ其後本研究  
ノ論文ヲ出版センガ爲メ起草中ナレドモ種々ナル突發的事件ノ爲未ダ之  
ヲ果サザルハ甚ダ遺憾トスル處ナルガ故ニ鳥瀉氏ニ於テ必要ナラバ何時

ニテモ實驗記録ヲ供覽ス可キ事ハ兼テ烏湯博士ニ申入レタル處ナリ

二、烏湯氏ノ「谷口氏ハ烏湯ガ谷口氏ノ實驗方法並ニ實驗成績ニ大體ニ於テ満足セシナリト主張スレドモツハ全然正反對ニシテ云々」ノ言モ亦甚不可解ニシテ余等ガ該報告ヲ公表スルニ先立チ烏湯氏ト特ニ會見シタル所以ノモノハ若シ烏湯氏ガ小生等ノ實驗ニ於テ甚シキ不備ノ點ヲ指摘セラル、ニ於テハ尙研究ヲ繼續ス可ク又大體ニ於テ満足ヲ得バ公開センガ爲ナリシモノニシテ烏湯氏ハ長興所長ノ「之デ満足スルカ」トノ質問ニ對シテ「満足ス」ト述ベラレタルニヨリ學界ニ向ツテ公表セシナリ尙氏ハ谷口ハ其實驗結果中ニ「ワクチン」ノ毒性ガ煮沸免疫元ニ比シ六倍ナリシニ其免疫力ハ二倍ナリキト説明シナガラ云々ニ就テハ余ハカ、ル事ヲ述ベタル記憶ナシ

三、烏湯氏ハ「烏湯ト全ク無關係ニ行ハレタル臺灣總督府中央研究所衛生課ヨリ報告セラレタル窒扶斯菌ノ煮沸免疫元ニ關スル結果ハ全然烏湯ノ主張ト一致シ居ルモノナリ云々、ト稱スレドモ前記實驗ハ烏湯氏ノ特許方法ヲ以テ製造セル煮沸免疫元ニ非ズ即チ煮沸濾過液ニ非ズシテ煮沸上清液ナリ

烏湯氏ノ所謂煮沸免疫元モ亦一種ノ蛋白分解產物ナルコトハ余等ノ明ニシタル處ニシテ其一部ハ濾過ニヨリテ吸着セラルベキコトハ烏湯氏モ認メタル事實ナリ尙臺灣總督府衛生課員ノ實驗ハ性質上ノ問題ハ兎モ角モ分量上ノ問題ヲ決スルニハ實驗不充分ナリト認ム  
烏湯博士ノ特許方法ヲ以テ製造セル煮沸免疫元ニ就テハ北里研究所ニ於テ醫學博士渡邊義政、内田重吉兩氏ノ報告アリテ其結果ハ余等ノ實驗成績ト大體ニ於テ一致セリ

四、烏湯氏ハ煮沸免疫元ノ許可不許可ヲ左右スル根本問題ナル「同一毒力ヨリ出發シタル比較検査」ハ谷口氏ハ一回モ行ヒタルコトナキモノナリ云々ト稱スレドモ、チブハ、バラチブス及コレラ菌製劑ニ於テ余等ガ此

試驗ヲ行ヒタルハ勿論ニシテ抄録中ニモ之レヲ明記セリ

五、又烏湯氏ハ免疫元ヲ治療用豫防用ト區別ス可キ理由ナシト稱セラル、モ各種免疫元ハ之ヲ治療ニ使用ス可キモノト豫防ノ目的ニ使用ス可キモノトハ實ニ於テハ同一ナレドモ量ニ於テハ常ニ差別アル者ナルコトハ言ヲ待タサル處ニシテ從テ同一細菌製劑ニ於テモ豫防ニ使用ス可キ者ト治療ノ目的ニ使用セラル、製劑トハ其製造方法并ニ使用方法ニ差違アル可キコトハ烏湯氏モ兼テ言明セラレタル處ナリ

即チ烏湯氏ガ大正十年七月本問題ニ關シ長興所長ニ宛タル書翰ノ中ニ、「豫防用ト治療用トニ從テ成劑モ異リ其使用法モ異ル可キデアアル、豫防用ニハ出來ルダゲ *Vollanigen* デ傳染局處ヘ治療用ニハ單ニ *Partial-antigen* デ血行中ヘ送ル云々」ト細菌學的製劑特ニワクチン又ハ煮沸免疫元ノ治療ノ目的ニ使用スル際ト豫防ノ目的ニ使用スル際ニ於ケル相違ニ關スル理論ニ就テ縷々トシテ記載セラレタルニ非ズヤ尙國家的見地ヨリスルモ細菌學的製劑ハ之ヲ豫防ノ目的ヲ以テ製造販賣スル者ト治療ノ目的ニ使用スル者トノ間ニハ許否ノ標準ニ大ナル相違アル可キ者ニシテ劣等ナル製劑ヲ以テ優秀ナル豫防劑ニ代ヘン事ハ防疫上重大ナル影響アル可キコトハ言ヲ待タザル處ニシテ治療劑ニ於ケルト大ニ其趣ヲ異ニハ尙烏湯氏ハ或ル種ノ製劑ガ治療用トシテ認可セラレタル時之ヲ豫防用ニ使用スルカ治療用ニ使用スルカハ醫師ノ自由權限内ニ屬スルモノナリト稱スレドモ治療ノ目的ニ於テノミ使用ス可キ者トシテ認可セラレタル製劑ヲ以テ行ヒタル豫防注射ハ國家又ハ當局ノ認メザル處ナリ

大正十三年十一月十日

傳染病研究所技師 谷口 臈 二

以上谷口氏ノ辯解書ハ一向要點ニ觸レ居ラズ、谷口氏ガ其ノ實驗記録ヲ公表スベキ責任ヲ有シナガラ、一個年以上

モ之ヲ實行セザルハ學者ノ態度ニ非ザルモノナリ、マタ相モ變ラズ『谷口氏ノ研究ノ内容ヲ大體ニ於テ鳥瀉ガ承認セルモノナリ』ト述べ居レドモ、其ノ虛僞ナルコトハ前文ニ盡シタリ。マタ谷口氏ガ其ノ公的ノ文書中ニ於テ『谷口氏ノ演說ニハ聽衆堂ニ溢レ一人ノ討論者モ無カリシモノナリ』ト陳述シアルモ、是レ谷口氏ノ研究ノ正シキコトヲ立證スル所以ヲ意味スルコトトハ何等ノ關係無キモノニシテ、國家ノ權威ヲ負ヘル傳染病研究所ヨリ此ノ如キ陳述ガ發表セラレタルコトハ實ニ滑稽ニシテ、余ハ一種悲哀ノ感ニ打タレザルヲ得ザル者ナリ。

マタ谷口氏ノ記述中ニ『特許權購入ノ約束アリト稱セラシル京都市新藥會社ヨリ云々』等ノ下劣ナル記事ニ至リテハ全然余ノ關知セザル所ナリ。『學界ニ向ツテ研究成績ヲ公表ス』ト曰フコトガ、此ノ場合『實驗記錄ヲ添附シテ全文ヲ相當權威アル専門學術雜誌ニ於テ公刊スルコト』或ハ單行本トシテ公刊スルコトヲ意味スルモノタルコトハ何人ニモ分リキリタル事項ナルニ、谷口氏ニハ此ノ明白ナル事理ガ不明ナリシト見ヘ、速記者ガ速記シタリトカ、演說シタリトカノ事實ヲ以テ、自家ノ研究結果ガ眞理ノ法庭へ提出セラレタルモノト考ヘ居ルガ如シ。

前記谷口氏辯解書中第三ノ條下ニ於テ、臺灣總督府中央研究所衛生部ヨリノ『チフス菌煮沸免疫元』ノ研究發表ニ對

シテハ、谷口氏モ流石ニ反抗スルコトノ不可ナルヲ自覺シタルモノト見ヘ、其代リニ『臺灣ニ於ケル此ノ研究ハ鳥瀉ノ特許方法ヲ以テ製造セル煮沸免疫元ニ非ズ』ト主張シ、以テ余ノ主張ヲ抑壓セント企テタリ。然レドモ煮沸免疫元ノ製造方法中ニ於テハ『陶土壁ニテ濾過スルコト』ハ特許ノ條項ニハ非ズシテ『單ニ菌體ヲ取り除キタルモノ』トナリ居ルナリ。『菌體ヲ取除ク方法』トシテ或ハ高速遠心機ヲ使用ストモ、或ハ陶土壁ニテ濾過ストモ、或ハ其他ノ方法ヲ採用ストモ、或ハ此等ノ方法ヲ併用ストモ、一向ニ差支ヘノ無キモノニシテ、何レモ皆煮沸免疫元ニ相違無キモノナリ。『煮沸』ト曰フ事項サヘモ、余ノ特許ノ主ナルモノニ非ズ、或ハ煮沸シテモ、或ハ、X線、或ハ紫外線ノ照射ヲ行ヒテモヨキナリ。特許ノ主眼ハ『從來ノ「ワクチン」中ニ含有セル「イムペヂン」ヲ破却シ、免疫元ヲ菌體ヨリ抽出シ、其ノ殘渣菌體ヲ去リタルモノ』ト言フコトガ主眼ニシテ、此ノ目的ヲ達スル爲ニ煮沸法以外ノ種々ナル方法ヤ、濾過法以外ノ種々ナル方法ヲ採用シテモ何等差支ヘ無キモノナリ、何レモ余ノ特許方法ノ範圍内ニ包括セラレ居ル事項ナリ。現ニ余ハ天然痘煮沸免疫元、虎列拉煮沸免疫元ニハ何レモ煮沸上清液ヲ使用シ居ルナリ。谷口氏モ亦現ニ『コレラ』菌煮沸免疫元ニ就テハ煮沸上清液ヲ煮沸免疫元トシテ使用シタリシニ非ズヤ、然ルニ前記(二)ニ於ケルガ如キ陳述ヲ敢



テスルハ、非常ニ惡辣無道ナルコトヲ自ラ立證セルモノニシテ、斷ジテ公正ナル國家ノ公人ノ態度ニテモアラズ、亦  
タ學術研究者ノ男ヲシキ態度ニテモ非ザルモノナリ。  
第五項ニハ余ガ曾テ長與所長ニ送リタリシ私信ヲ引證シ  
テ○養○沸○免○疫○元○ヲ○傷○ケ○ン○ト○試○ミ○ラ○レ○タ○リ○。○コ○レ○モ○亦○余○ノ○不○審  
トスル所ニシテ普通學者ノ爲サザル行動ナリト信ズ。余ハ  
治療ノ目的ニハ所謂部分的抗原（例ヘバ殺菌素溶菌素等ガ  
發生セズ單ニ凝集素ノミ發生スルガ如キ抗原）デモ目的ヲ  
達シ得ルガ、併シ免疫元ニハ『完全ナル免疫元』ヲ使用セザ  
ル可カラズトノ意見ヲ述ベタリ。而シテ養沸免疫元ハ凝集、  
溶菌、殺菌、沈澱、抗毒其他諸反應ヲ呈スル完全ナル免疫  
ヲ發生セシメ得ル完全ナル免疫元』タルナリ。併シコレハ  
『治療用ニハ部分的免疫元デモ宜シイ』ト言ヒタル迄ニシ  
テ『部分的免疫元』ヲザルベカラズ』ト主張セル譯ニ非ズ、  
『完全ナル免疫元』ナレバ猶ホ結構ナル次第ナルコトハ勿論  
ナルモノナリ。故ニ谷口氏說ノ如ク『同一細菌製劑ニ於テ  
モ豫防ニ使用スベキ者ト治療ノ目的ニ使用セラルル製劑ト  
ハ其ノ製造方法並ニ使用方法ニ差違アル可キコトハ鳥瀉氏  
モ兼テ言明セラレタル所ナリ』ト述べ居ルハ失當ノ甚ダシ  
キモノナリ。現ニ『ワクチン』ニ於テ豫防用ト爲スモノモ、  
治療用ト爲スモノモ、同一製劑ニテ事足ル次第ニシテ、二  
種ノ異リタル製造方法ニ基キテ甲ハ治療用乙ハ豫防用ト言

フ○様○ニ○二○種○ノ○異○リ○タ○ル○製○劑○ヲ○發○賣○シ○居○ル○次○第○ニ○テ○ハ○非○ザ○ル  
モノナリ。

儲テ前記大正十三年十一月十日附谷口氏辯解書ニ對シ、  
『更ニ此上御意見ノ候得者一度御上京相成度、左スレバ谷  
口博士局長等ヲ一堂ニ集メ、貴下ノ御意見ヲ承リ候様ニ取  
計ヒ可申候、最モイヅレモ繁忙ノ身ニツキ、御出京出來候  
日取前以テ御報被下、當方ノ都合相成候時日ナルカ否カ御  
報致候様致度候云々』ト内務當局ヨリ余ニ申越サレタリ、  
コレ大正十三年十一月十三日ノコトナリキ。

右ニ就キ余ハ最モ希望スル所ナルヲ以テ、何時ニテモ上  
京シ指定ノ場所へ出頭スル旨ヲ返事セリ。然ルニ大正十三  
年十二月十九日附ニテ余ハ左ノ意味ノ書面ヲ當局ヨリ受取  
リタリ。

『先般御談ノ件、衛生局長トモ協議致候處、先以テ谷口氏  
ト貴下ト本件ニ關スル最初ヨリノ顛末ニツキ、局長及ビ  
小生ノ面前ニ於テ腹藏無ク意見ヲ交換セラレ候様致度ト  
申事ニ相成候、就テハ明十四年一月七日ヨリ十五日迄ノ  
間、貴下御上京ニ差問ヘ無之時日御取極メ御報告被下度  
右交換セラレ候意見ヲ承リ候上、善後ノ方法決定可致ト  
存候云々』

余ハ之ニ對シ『御指定ノ時日ニ於テ、御指定ノ場所へ出  
頭可致』旨ヲ返事シタリ。然ルニ是ニ對シ大正十三年十二



月二十三日附ヲ以テ左ノ如キ書面ガ當局ヨリ達シタリ。  
『拜啓陳者本月二十一日附御書翰正ニ拜誦仕候、先方トモ  
打合セノ結果明年一月十三日午後一時ヨリ内務省ニ於テ  
御意見交換致スベキ事ニ相成候間同日時迄ニ御出頭相成  
候様致度此段得貴意候。敬具』

余ハ早速受諾ノ返事ヲ發シ八日夜私書ヲ以テ上京ノ旨ヲ  
荒木總長ニ報告シ、大正十四年一月九日朝ニハ東京ニ着シ  
居タリ、然ルニ大阪ニ於ケル余ノ研究所ヨリ打電アリ『十  
三日ノ會合一時延期』ト申シ來レリ。余ハ不思議ニ考ヘ、  
一月十日内務省ニ當事者ヲ訪問シ、眞僞ヲ直接尋テタルニ  
『十三日ノ會合ニハ最初片岡政務次官モ其席ニ列スル考ニ  
テアリシガ、ソノコトヲ延バシ、最初ハ直接ノ當局者間ノ  
ミニテ意見ヲ交換シ、ソレニテモ纏マラヌ時ハ更ニ自分親  
シクソレヲ聽取スルノ意ニシテ、會合ヲ延期シタルニ非ズ』  
ト言明セラレタリ。故ニ余ハ宿ニ歸リ其ツモリニテ準備シ  
居タリ。

然ルニ一月十一日朝ニ至リ、長與傳研所長ヨリ余ノ宿所  
ヘ電話カカリタリ、長與氏曰ク『學術上ノ問題ヲ政治屋ニ  
判定セシムルハ非ナリ』ト。余曰ク『今回ノ會合ハ學術上ノ  
問題ヲ素人ニ向ツテ専門的ニ判定ヲ請フ爲ニ非ズ、余ハ當  
局ノ指令ニ從テ出京シタル者ナリ』ト長與氏曰ク『本件ノ如  
キハ事務次官カ衛生局長ニテ取扱フ可キモノナリ』ト。余

曰ク『其ノ様ナ異議ヲ今頃余ニ申込ミ來リテモ余ノ關知セ  
ザル所ナリ』ト。長與氏曰ク『トニカク島蘭ト三人ニテ會見  
談合シタシト。余曰ク『余モ亦希望スル所ナリ』ト。

斯ノ如クニシテ當日午後一時ヨリ三時迄ノ間ニ於テ長與  
氏ト余ハ島蘭東大教授ヲ中ニ据エテ、余ノ宿所ナル『東京ス  
テーシヨンホテル』ニテ會見スルコトナレリ。

定刻ニ至リ先ヅ島蘭氏、次デ長與氏來リタリ。依テ余ハ  
煮沸免疫元ニ對シ從來傳研ノ示シ來リタル態度ノ公正ヲ失  
スルモノアルコトヲ一々指摘シ、特ニ主任調査者タル谷口  
氏ノ行動ノ不埒千萬ナルコトヲ難ジ、今回余ノ陳情書ニ對  
スル答辯書ノ内容ノ非學者的ナルコトヲ攻撃シ、且ツ大正  
十二年七月末日ニ於テ已デニ『豫防用ニハ不許可トスルガ  
如キ態度ヲ取レバ事態重大トナルガ故ニ此點ハ研究ノ積ム  
迄保留ト爲シ置カレタキコト』ノ余ノ希望ニ對シ所長ハ、  
『諾』ト約束シテ置キ乍ラ、今日此ノ如キ措置ニ出ヅルコト  
ハ不信ナリト絶叫シ、余ハ學術ノ神聖ノ爲ニ、マタ大學教  
授ノ名譽ノ爲ニ、一步モ退キ得ザル者タルコトヲ述ベタ  
リ。

右ニ對シ長與氏ハ『惡カツタ』トノ言ヲ漏シタル様ニ余ハ  
記臆ス。又タ余ハ『谷口氏ガ公人トシテアルマジキ不埒ナ  
ル言ヲ弄シタリトノ情ヲ知り乍ラ、其人ヲノミ重用スルハ  
傳研所長トシテハ責任ヲ重ンズル者ト謂ツ可カラズ』ト申

シタルニ對シテハ、長與氏ハ『長キ沈黙』ヲ以テ之ニ答ヘタリ。

結局長與氏ハ事ノ茲ニ至リシハ自分(傳研所長)ノ責任ナリト感ズルガ故ニ『傳研所長ガ一切ヲ引受ケテ善後ノ方法ヲ講ズ』トノコトニ歸着シ、余等ハ散會シタリ。余ハ心ノ中ニテ長與氏ガ如何ナル善後ノ方法ヲ講ズトモ、ソレハソレナリ、ソレアルガ爲ニ十三日ノ會合ハ余ノ方ヨリ進ミテ取り消ス可キ限リニ非ズト考ヘタリ、故ニ余ハ左ノ如キ書面ヲ書留ニテ傳研所長宛ニ發送シタリ。

拜啓

益々御健勝の段奉賀候、扱て本月十三日谷口技師と小生と内務省に於て會見致し、養沸免疫元に關し意見交換の事に相成居候に就ては、小生が一昨年來要求致し居候『養沸免疫元に關する谷口技師等の追試研究成績(實驗乃至検査の詳細なる記録を含むもの)』を公表しある雜誌とか單行本とか、乃至は未だ右印刷に附する運びに相成居らず候はゞ『後日變更又は抹消し得ざる形式に於て書寫したる原稿を持參せしめ、願くばそのものを小生へ御與へ被下度願上候。

谷口技師の手中にのみ握り居らるゝ谷口技師の原稿の中より何事を御申出でに相成候とも、現在の如く事態重大と相成りたる際には、一切通用せざることを、御諒承被成

下度候事と存じ候へども、念の爲前顯の主旨を申上げ年月日を明記して『眞理の法庭』に提出せられたる證據書類に立脚して、相互に意見交換相成候様に仕度右特に申進じ貴意を得候。頓首敬具

大正十四年正月十日

京都帝國大學教授 鳥 潟 隆 三

傳染病研究所

所長 醫學博士 長與又郎殿

一月十二日午後六時長與氏ト鳥蘭氏ト訪問シ來リ、余等ハ相携ヘテ會食ニ赴キタリ、其席上ニテ長與氏ハ善後ノ案ヲ余ニ示サレタリ。鳥蘭氏曰ク、『谷口氏ノ研究ハ研究デソレニテ打チ切りニサセヨ、ソレヲ鳥潟ガ何程攻撃シテモ役ニ立タヌナリ』ト。余ハ併シナガラ飽ク迄モ谷口氏ノ研究結果ヤ、余ノ學說ニ對スル谷口氏ノ反對說ノ不正ナルコトヲ立證シ、學者タルノ責任ヲ盡スト同時ニ、谷口氏ヲシテ學者タルノ義務ヲ自覺セシメ、反省セシメザレバ止マヌ考ナルコトヲ述ブ。長與氏ノ善後ノ案ニ對シ余ハ同意スルヤトノ長與氏ノ質問ニ對シテハ、余ハ確答ヲ與ヘズ、明十三日迄ニ勘考シ置クコトトナシ散會セリ。

一月十三日、午前十一時頃長與氏來訪シ『昨夜ノ善後案』ニ對スル諾否如何ヲ求ム。余ハ『大體ニ於テ承諾』ノ旨ヲ述べ、且ツ『今後傳研ニテ再ビ行ハル可キ効力毒力ノ比較試

驗ノ完了豫定期日』ニ就テ意見ヲ交換シ大約向フ一個年位ノ中ニ試験ヲ完結セシメ、公表(學術雜誌ニ公刊)セシムルコトニ一致ス(學界ニ存在セザル怪シゲナル事實ヲ傳研ガ内務當局へ申達スルコトハ今後全廢ストノコトナリ)。

同日午後一時十分前余ハ約ノ如ク内務省ニ至リ、内務政務次官ヲ訪問シ、約ノ如ク出頭シタル旨ヲ告グ。之ヨリ前内務省ノ玄關ニテ余ハ長與所長ガ内務省ヨリ退出スルニ會ヒタリ。同氏ハ今回ノ事ノ次第ヲ衛生局長ニ報告セシナリ。儲テ政務次官曰ク『今回ノ事ハ長與傳研所長ガ責任ヲ以テ引受ケ善後ノ始末ヲツケルトノ申出デアリシ故ソレニ一任シタリ、然レドモ長與所長ヨリハ余ニ對シ未ダ何等ノ復命無シ、故ニ其ノ復命無キ間ハ鳥漏ト談ヲスルコト能ハズ』トヨリテ余ハ『ソレナラバ長與所長ハ多分衛生局長ニ一切ヲ話シテ依頼シテアルコトト考ヘマスカラ、私ハ衛生局長ニ面會シ、衛生局長カラ貴下ニ復命シテ頂キマセウ』ト述べテ、直チニ山田衛生局長ヲ其ノ室ニ訪ネタリ。

茲デ余ハ長與所長ヨリ提出セラレタル善後ノ案ヲ示シ、余ハ之ニ對シ反對ノ態度ヲ取ラヌ旨ヲ述べタリ。

衛生局長ハ何故ニヤ『此ノ案ノ全文ヲ世ノ中へ發表スルコトダケハ控ヘテ吳レ』ト申サレタル故余之ヲ諾シタリ。然レドモ其ノ主要ナルコトハ雜誌等ニヨリテ既ニ世上ニ知ラレ居ル通りニシテ、第一、煮沸免疫元ヲ豫防劑トシテ不

許可トノ態度ヲ退ケテ、許可不許可ハ當分保留シ、研究ノ結果更ニ改メテ許可不許可何レカラ決定スルコト。併シコレニハ學界ニ公刊セラレタル研究結果ヲ根據ト爲スベキモノニシテ、公刊モシテ居ラヌ事實、有ルカ無キカ不明ナル事實(例ヘバ石原氏ノ「ベスト」菌「ワクチン」煮沸免疫元ノ比較ノ如キ)ヲ基礎ト爲サザルコト。第二他ノ大學ヤ研究所ニ於ケル研究結果ヲモ十分參考スルコト。而シテ長與所長ヨリシテ此ノ如キ研究ヲ發表セラレタキコトノ希望ヲ各大學ヤ研究所ニ向ツテ開陳スルコト(此等ノ點ハ長與所長ハ責任ヲ以テ引受ケルト言明セリ)。

要スルニ『學術研究ヲ學術研究トシテ十分ニ尊重シ、十分公明正大ニ取扱フ可キコト』ニ歸着セルナリ。

山田衛生局長ハ長與氏ノ提出シタル善後案ヲ清書セシメ之ヲ持參シテ、政務次官ニ今回ノ事件ノ落着セルコトヲ復命シ來レリ。ヨリテ余ハ次デ政務次官ニ面接シ、今回ノ事件ノ落着ニツキ謝辭ヲ述べ内務省ヲ退出セリ、時ニ大正十四年一月十三日午後四時頃ナリキ。

## 愚見

上來記載セルガ如ク、今回ノ對決事件ナルモノハ、其ノ由來スル所遠ク、マタ其ノ原因モ決シテ一二ニシテ止マラザルモノナリ、今マ其ノ主要ナル原因ヲ列擧スレバ大略下ノ如シ。

第一、最初煮沸免疫元製造販賣ノ出願ガ大正九年七月ニ提出セラレタリシニモ拘ラズ、大正十一年四月頃迄約二個年間願書ガ唯ダ當局者ノ何人カノ間ニ投ゲ遣リニセラレ居タリシコト。

第二、傳研ガ『煮沸免疫元ニ對シ公然反對ノ態度』ヲ決議シタルハ大正十二年八月ナリシニ、學術的論據ノ公表(全文公刊ヲ意味ス)ガ余ノ再三ノ督促ニモ拘ラズ大正十二年十二月ニ至ル迄モ實現セラレザリシコト。

第三、從テ『煮沸免疫元ノ許否ノ決定』ガ滿四個年以上モ何レトモ決定セズ、マタ何日決定スルカノ見當モ立タズ、餘リニ長ビキ居ルコト。

第四、鳥瀉ノ陳情書ニ對スル傳研ノ答辯ガ誠意ヲ缺キ居リテ、事實相違ノ事ヲ述ベ居ルコト(例ヘバ(一)傳研ハ煮沸免疫元ノ追試實驗記錄ヲ公表シタリト稱スルガ如キ、(二)鳥瀉ガ其ノ内容ニ満足ヲ表セリト曰フガ如キ、或ハ(三)石原喜久太郎氏ガ「ベスト菌」ヲクチン」煮沸免疫元比較研究ノ結果、谷口腆二氏ト同一ノ結論(鳥瀉主張ノ正反對)ニ到達セリト内務省ニ申達セルガ如キ、(四)或ハ煮沸上清液ハ余ノ特許ニ係ハル煮沸免疫元ニ非ズトスルガ如キノ類)

第五、煮沸免疫元ノ傳研ニ於ケル調査主任技師谷口腆二氏ガ、大正十二年四月四日傳研ニ於ケル其ノ技師室ニ

テ、井上、吉積兩氏ノ面前ニ於テ頗ル不埒ノ言ヲ弄シテ鳥瀉ニ侮辱ヲ加ヘタルコト。

傳染病研究所ガ發表シタリシ『煮沸免疫元研究ノ結論』ノ學術上ノ正邪ハ全ク別問題ト爲スモ、以上第一ヨリ第五ニ掲ゲタルガ如キ事實ガ鳥瀉ヨリ陳述セラレ居ルニ於テハ、内務有司ハ其儘ニ打テ棄テ置ク可キモノニハ非ズト愚考ス。是レ即チ『傳研谷口氏ト鳥瀉ト立合ヒノ上ニテ意見ヲ交換スベシ』トノ措置ガ取ラレタル理由ニシテ、頗ル當然ノコト、謂フ可シ、紛々タル輩ガ此點ニ就テ何等批評ヲ試ミルベキノ限リニ非ザルモノナリ。

然ルニ傳研側ガ自ラ進ンデ會見ノ日取迄モ約束シテ置キ乍ラ、其ノ間際ニ至リテ、或ハ『政治家ガ學術上ノ裁判官ト爲ル可キニ非ズ』トカ、或ハ『政務次官ガ此ノ如キ事件ニ關係スベキニ非ズ』トカ、或ハ『私的ノ會合ノ筈ナリシモノガ公的ナルヲ見出シタリ』トカノ假面的理由ヲ設ケテ、終ニ双方立合ノ上ニテ以上ノ點ニ就テ正邪黑白ヲ決スルコトヲ避忌シタルハ、全ク自ラ願ミテ縮ナラザルモノアルガ爲ニ、正々堂々聽衆ノ面前ニ於テ其ノ所信ヲ發言スルノ勇氣ヲ喪失シタルモノナリト斷定セラルルモ何等辯明ノ辭無カシタル善後案ノ爲ニ前記第一ヨリ第五迄ニ記シタル事項ハ消失シタル次第ニ非ザルガ故ニ、右ニ對シ傳研當事者ハ更ニ

責任アル答辯ヲ公開スベキ義務アルモノナル可シ。余ハ痛憤措ク能ハザルモノアリ、飽ク迄モ谷口腆二氏ノ不埒ヲ彈劾スルモノナリ。

傳研ヨリ發表セラレタル煮沸免疫元追試結果(大正十四年一月二十日實驗醫學雜誌)ノ學術的正邪黑白ニ就テハ無論政治家ノ批判ヲ請フ迄モ無ク、本邦ノ學界ハ既ニ左ノ諸項ニ立脚シテ一定ノ見解ヲ下シ居ルコトナラント余ハ信ズル次第ナリ。

第一、長與傳染病研究所長ノ専門ハ病理解剖學ニシテ同氏ハ免疫學細菌學等ニ就テハ過去ニ於テ何等ノ卓見ヲモ公表シタル者ニ非ズ、從テ免疫學上ノ研究ニ對シ常人ヨリモ秀デタル判定批判ノ能力無キハ勿論ナリ。主查技師谷口腆二氏ト雖從來一般免疫學上ニ於ケル作業ノ經歷甚ダ微々タル者ニシテ、煮沸免疫元ニ關スル余ノ獨文著書ヲ全部讀破シ居ザルハ勿論、研究期間ノ如キモ僅カニ半ケ年位ナリ。

第二、鳥瀉ハ一九一三年ヨリ煮沸免疫元ヲ原理ヨリシテ系統的ニ研究シ、一九一七年歸朝以來モ自ラ此ノ研究ヲ繼續シ、或ハ研究生ヲシテ研究ニ從事セシメ、既ニ可成リノ研究成績ヲ内外ノ學界ニ公表シ居ル者ナリ。

第三、谷口腆二氏ガ鳥瀉ノ學說ニ反對スルノ說ハ毫モ取ルニ足ラザルモノナレドモ、鳥瀉及ビ其ノ學派ヨリ蒐

ニ角ニ一々反駁セラレ居ルニ拘ラズ、谷口氏ハ之ニ對シ純正學術雜誌上ニ於テ何等ノ答辯ヲモ發表シタルコト無シ。

第四、谷口氏ノ最モ信賴スル北里研究所員渡邊、内田兩氏ノ煮沸免疫元ニ關スル發表ハ、谷口氏ノ結論ニ一致スルモノニ非ズシテ、却テ鳥瀉ノ學說ヲ立證シ居ルモノタルコトヲ指摘セラレ居ルコト(即チ同時ニ谷口氏ハ他ノ實驗記錄ヲ十分觀察スルノ能力無キ者タルコトヲモ表示セルコト)。

第五、免疫學上ノ研究作業ニ於テ、マタ免疫學者トシテノ經歷ニ於テ、將タ又タ免疫學上ノ造詣ニ於テ、谷口腆二氏ト比較ヲ許サレヌ程ノ斯道ノ權威者トシテ目サル可キ臺灣總督府中央研究所衛生部々長堀内博士ノ研究室ヨリ發表セラレタル「チフス」菌煮沸免疫元ノ精細ナル研究ノ結果ハ鳥瀉ノ主張ト殆ンド一致スルモノナリ。

備考。谷口腆二氏ハ以上ノ研究ハ煮沸免疫元ニ非ザルカノ如キ言ヲ弄スト雖、コレ誤謬ニシテ「煮沸濾過液」モ「煮沸上清液」モ何レモ余ノ特許ノ範圍ニ屬スル「煮沸免疫元」ニ相違無キモノナリ。

谷口氏ノ此ノ如キ陳述ハ自ラ學者タルノ資格ヲ喪失セシメタルモノナリ。

第六、志賀潔博士指導ノ下ニ行ハレタル京城醫學專門學

校朴氏ノ赤痢菌ニ關スル研究報告モ亦『生抗原』ヨリモ

『煮沸抗原』ノ方ガ免疫元トシテ優秀ナルコトヲ立證セ

リ(詳シク曰ヘバ、生抗原ニテハ家兔ハ殆ンド免疫不

可能ナルニ反シ、煮沸抗原ニテハ比較的容易ニ免疫可

能トナル)。

第七、エールリヒ氏時代ヨリ確定セラレ居ル類毒素(Toxi-

pt.)ナルモノハ『毒力ノミハ大ニ減弱シタレドモ抗原

性能働力(結合力)ガ生毒素(Toksin)ノ場合ノ如ク保存

セラレ居ルモノヲ指スナリ、此ノ類毒素ノ事實中ニハ

既ニ煮沸免疫元ノ原理ノ一端ヲ包含スルモノナリ(詳

細ハ専門雜誌ニ於ケル余等ノ發表ヲ參照セヨ)。

本邦ノ學界ニ於テ大概ノ研究者ハ以上第一ヨリ第七ニ揭

ゲタル事項ヲ正當ニ認識シ得ルナラン、然ラバ煮沸免疫元

ニ關シ谷口氏ノ主張正シキカ將タ又々鳥瀉ノ主張ニ聽ク可

キカノ取捨ニ迷フガ如キコト無カルベキ筈ナリ。宜ナリ

長與傳研所長ガ谷口技師ノ追試ヲ追試トシテ打ち止メ、

別ニ新タニ「ワクチン」、「コグチゲン」ノ効力毒力ノ比較試

驗ヲ再ビ開始セシメ、其ノ結果ニ立脚シテ更メテ許否ノ判

定ヲ下サンコトヲ約束セルコトヤ。コレ自然科學ヲ尊重ス

ルノ眞骨頂ヲ發揮セルモノニシテ大ニ推服ス可キノ點ナリ

トス。紛々ナル者之ニ對シテ兎角ノ批評ヲ試ム可キ限リニ

非ザルナリ。

多數ノ菌種中ニハ必ズシモ凡テ煮沸免疫元ノ原理ヲ適用

シ難キモノモアルコトナラン。然レドモ防疫上ニ必要ナル

腸室扶斯菌、虎列拉菌、赤痢菌、ペスト菌等ニ就テ從來ノ

「ワクチン」ヨリモ効力毒力ノ比較上、『煮沸免疫元』ノ優

ル點ヲ立證シ得バツレニテ事足ル次第ナリ。目下ノ所ニテ

ハ滿四ヶ年以上ノ歲月ヲ費シタルニモ拘ラズ、傳染病研究

所ノミガ唯獨リ煮沸免疫元ノ優越セル事實ヲ認識シ得ザル

ノ状態ニ在ルモノニシテ、其他ノ研究發表ハ殆ンド凡テ煮

沸免疫元ヲ推賞ノ價値アリトシテ認メ居ル者ナリ。

此等ノ研究ハ關係スル所非常ニ重大ナリ。四圍ノ事態ガ

前記ノ如ク押シ迫リ居ルニモ拘ラズ許否ニ關シテ責任ヲ荷

ヒ居ル國家ノ傳研ノミガ今後何年モ煮沸免疫元ヲ認メ得ズ

シテ責任ヲ他ニ轉嫁スル譯ニハ行カヌモノナリ。

傳研ニテ今後コレガ研究ノ任ニ當ラン者ハ唯ダ是レ眞理

ノ神ノ前ニ至誠ヲ捧ゲ、虚心坦壞、自然科學者ノ本領ヲ發

揚スベキナリ。輕忽不謹慎、驕慢不遜、一時ノ賣名ヲ目的

ト爲スガタメニ徒ラニ中傷之レ事ト爲シ、杜撰ナル公表ヲ

敢テシテ、以テ他ノ血心ヲ注ギタル多年ノ研究結果ヲ一朝

ニシテ正面ヨリ蹂躪シ去ラント欲シ、何等ノ敬意ヲモ、何

等ノ情義ヲモ顧ミザルノ態度ニ出ヅル時ハ、第二、第三ノ

對決事件ヲ誘發スベキハ勿論、其ノ極マル所計リ知ル可カ



ラザルモノアラン。是レ斷ジテ傳研ノ職責ニ非ズ、何トナ  
レバ、斯ノ如キノ措置ハ不純ノ動機ト不當ノ方法ト依リテ  
自然科學ノ眞面目ナル研究者ヲ生キ乍ラニシテ土中ニ埋メ  
去ラント欲スル無道ノ行爲ナレバナリ、余等亦決シテ默シ  
テ止ム可キ者ニハ非ザルナリ。局ニ當ラン者ハ眞理ノ爲ニ  
人道ノ爲ニ、又タ純眞ナル研究者ノ態度ノ爲ニ、今回ノ事  
件ニ鑑ミテ自ラ大ニ反省スル所アリテ可ナラン、而シテ速  
カニ着々反省ノ實ヲ示ス所アリテ可ナラン。敢テ苦言ヲ呈  
スル次第ナリ。

追記、紛々タル雜誌記者等ガ『荒木京大總長ノ命ニテ余ガ上京シ傳研ト對  
決セント欲シタリ』トカ、或ハ『京都帝國大學ニテコソ煮沸免疫元ヲ  
追試スベキモノナリ』トカ種々ノ記事ヲ掲グト雖、此等ハ一顧ノ要無  
ナキモノナリ。京大ガ追試スルト否トハ、京大ノ自由ナリ。傳研コソハ  
國家ノ諮問機關トシテ正シキ追試ヲ遂ゲ學術的ニ其ノ成績ヲ學界ニ發  
表(公刊)スベキ義務アルモノナリ。傳研ハ其ノ責任ヲ正シク自覺シ  
速カニ誠意アル男ラシキ實行ニ入ルベキモノナリ。

### 一般讀者ニ告グ

一、東京帝國大學傳染病研究所ハ、新シキ學術研究ノ結果タル「イムベヂン」  
現象、「イムベヂン」學說及ビ「煮沸免疫元」ニ對シ、當該研究所ノ義務  
トシテ第一、「之ヲ學術的ニ鑑識スベキ」ニモ拘ラズ鑑識ノ能力ヲ發揮セ  
ズ、第二、「之ヲ學術的ニ正シク追試スベキ」ニモ拘ラズ追試ノ能力ヲ發  
揮セザリシモノナリ。

二、加フルニ此ノ新研究ヲ最初大正十一年四月頃迄點殺シ居タリシガ、余ガ  
『傳研ハ其ノ義務ヲ履行スベキモノナリ』ト逼ルニ及ビテ始メテ、大正十

一年七八月頃ヨリ大正十二年七月ニ至リテ追試ヲ完了セリト稱スト雖、  
元來純眞ナル學者ノ態度ヲ忘レ、余ノ新研究ヲ中傷シ又ハ破棄セントノ  
動機ヨリ出發シタル追試ナリシガ故ニ、最初ヨリ余ノ研究結果及ビ學說  
ヲ十分ニ會得シ居ザリシハ勿論、傳研自家ノ追試ハ杜撰、其ノ所說ハ生  
硬、而シテ中傷百端。加フルニ大正十三年十二月ニ至ルモ猶ホ自家結論  
ノ事實的根據ヲ學界ニ公刊スベキノ義務ヲ果サズ。マタ余ノ學派ヨリ公  
表セラレタル「傳研ニ對スル各種ノ反證的研究報告」ニ對シ傳研ハ何等  
ノ學術的辨駁ヲモ學界ニ公表シ得ザリシモノナリ。然カモ一方內務省ニ  
對シテハ虛偽ノ報告、事實相違、事實正反對ノ申達ヲ敢テシテ、以テ內  
務上司及ビ世間ヲ瞞着セント試ミタル跡歴然タルモノアリ。是レ決シテ  
『純正學術上ノ意見ノ相異』ノ問題ニテハ非ザルナリ。從テ之ガ爲ニ遂ニ  
大正十四年一月十三日ノ公然約束セラレタル對決事件ヲ誘發スルニ至リ  
シモノナリ。然レドモ傳研ハ自ラ顧ミテ疚シキモノアルガ爲ニ言フ左右  
ニ拙シ、且ツ普通新聞、醫事雜誌等ヲシテ、却テ逆ニ內務上司ノ此ノ機宜  
ニ適シタル正當ナル措置(即チ對決)ヲ攻撃スルガ儘ニ任せシメ、卑怯ニ  
モ先キニ自ラ公約シタリシ對決ヲ避思シ了リ、事前ニ於テ「善後案」ナル  
モノヲ余ニ提出シテ、僅カニ一時ヲ糊塗シタルニ過ギザルモノナリ。

### 三、

事實既ニ此ノ如シ。コレニテモ「傳染病研究所ハ煮沸免疫元ニ對シ公正  
ニ其ノ職責ヲ盡シタリシモノ」ト謂フ可キカ。明白ナル虛偽ノ報告ト事  
實正反對ノ申達ト上司ニ致シ以テ余ノ學說ヲ蹂躪シ、帝國大學教授ト  
シテノ余ノ學者ノ生命ヲ絶滅セント欲スルノ態度ヲ取り來リシハ横逆無  
道。余ハ傳染病研究所ノ這般ノ行爲ハ種々ナル意味ニ於テ斷ジテ許容ス  
ベカラザルモノナリト信ズ。傳研ニハ多士濟々、決シテ理義ヲ辨シ得ザ  
ル者ノミニテハアルマジ。即チ對決事件ハ「專問學術上ノ見解ノ正邪黒  
白」ヲ論議スルモノニ非ズシテ、傳研ガ大正九年七月以降大正十三年十  
二月末日ニ至ル迄滿四年以上煮沸免疫元ニ對シテ示シ來リタル態度ガ  
果シテ公正ナリヤ否ヤヲ論議スルコトヲ目的トナセルモノナリ。是レ余  
ガ本件ノ願末ヲ公表シテ之ニ卑見ヲ加ヘ、以テ內務省・文部省・東京帝國  
大學及ビ傳研ノ當局者タルト否ト論無ク、敢テ一般讀者ノ公正ナル批  
判ニ訴フル所以ナリ(大正十四年二月十五日)。